

正教時報

THE ORTHODOX CHURCH IN JAPAN



正教時報

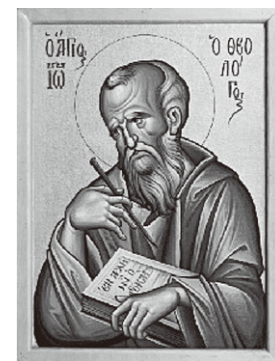
昭和四十五年二月十九日(第三種郵便物認可)
平成二十年十月二十日発行(第一四一七号)

発行人 山口義人
編集人 松井貢治

発行所 正教時報社 〒100-0002東京都千代田区神田駿河台四丁目一の三
電話(代表)〇三三二九九一―八八五番(毎月一回二十日発行)
振替 〇〇一六〇一六一三二七二〇五 年々二四〇〇

10月の聖人暦

- | | | | |
|-----|---|-----|--|
| 1日 | ゴルテイナの主教成徳なる聖エウメニイ (7C) | 12日 | 聖致命者ダダ、ベルシヤの太子ガウエツタイ及びその姉妹カズドヤ (4C) |
| 2日 | アンテイオケの聖致命者トリフィム・サワテイ及びドリメドント (216) | 13日 | アルメニヤの神品聖致命者グリゴリー (335) |
| 3日 | ロマの聖大致命者エウスタフイ (118) | 14日 | 至聖まる女宰生神女永貞童女マリヤ、聖使徒アナニヤ(七十門徒) (8C) |
| 4日 | 聖使徒コドラト、神品致命者エペソの主教聖イパテイ、司祭聖アンドレイ (8C) | 15日 | ヴラヘルナの佯狂者聖アンドレイ (10C) |
| 5日 | 聖預言者イオナ (9C)、シノベの主教聖致命者フォカ (117) | 16日 | グレチヤの神品致命者聖ディオニシイ、司祭聖ルステイク、輔祭エレウフェリイ (96) |
| 6日 | 聖致命者アンドレイ、イオアン、ペトル、アントニン (9C) | 17日 | アテネの主教聖イエロフェイ、カペトリヤの主教克肖聖致命者ペトル (3C) |
| 7日 | イコニヤの初致命女聖使徒聖フェクラ | 18日 | モスクワの府主教全ロシアの奇蹟者成聖者ペトル、アレキシイ、イオナ及びフィリップ |
| 8日 | アレクサンドリヤの克肖女聖エウフロシニヤ (5C)、克肖者聖神父ラドネジの奇蹟者セルギイ (1391) | 19日 | 聖使徒フォマ、カッパドキヤの聖致命女エロテシス、アトス山の聖致命者マカリイ (1530) |
| 9日 | 聖使徒福音神学者イオアン | 20日 | シリヤの聖致命者セルギイ及びワクフ (390) |
| 10日 | カルタゴの聖致命者カリストラト及び49人の致命者 (304) | 21日 | アンテイオケの成徳なる聖処女ベラギヤ (303) |
| 11日 | イコニヤの成徳なる表信者聖ハリトン (350) | 22日 | 列祖義人聖アウラム及びその甥聖ロト (前2000) |
| | | 23日 | ニコミデヤの聖致命者エウラムピイ及びエウラムピヤ (303) |
| | | 24日 | 聖使徒7輔祭の一人フィリップ |
| | | 25日 | キリキヤの聖致命者プロウ、タラフ及びアンドロニコ (304) |
| | | 26日 | ベルガモの聖致命者カルプ、パピラ、アガフォドル及び聖致命女アカフォニカ (351) |
| | | 27日 | メデオランの聖致命者ナザリイ、ゲルワシイ、プロタシイ及びケルシイ |
| | | 28日 | アンテイオケの神品聖致命者克肖者聖リキアン (312) |
| | | 29日 | 聖致命者百夫長聖ロンギン |
| | | 30日 | 聖預言者オシヤ(前320)、クリトの成徳なる聖致命者アンドレイ (767) |
| | | 31日 | 聖使徒ルカ、聖致命者マリン (4C) |



目次

ロシア正教会駐日ポドヴォリエ アレクサンドル・ネフスキイ聖堂の成聖	司祭ディミトリイ 田中 仁一	3
東京正教神学院入学式	司祭ディミトリイ 田中 仁一	6
セルギイ府主教永眠記憶パニヒタ	輔祭グリゴリイ 水野 宏	8
聖ソフィア修道院 ニコライ佐山大主教「永眠		10
名古屋ハリストス正教会主催 夏休み子ども会	司祭ゲオルギイ 松島 雄一	11
克肖なる我が神父ラドネジの奇蹟者聖セルギイ	司祭ディミトリイ 田中 仁一	12
聖ニコライとセルギイ府主教	⑤ 主教 セラフイム	14
正教会クロスワードパズル		18
『神への途』(2)		20
今月の奉事式		22
編集後記		23

表紙の写真《聖使徒福音者ルカ》

教会は十月三十一日に、「ルカ伝に因る聖福音」と「聖使徒行実」の著者である聖使徒福音者ルカを記憶する。彼は、アンテイオキアに生れて医学を学び、福音書に「主は又別に七十門徒を選び（ルカ十・一）」とあるところの、七十人のお弟子の一人となった。

ルカ伝二十四章には、クレオパともう一人のお弟子がイエルサリムからエムマウスに向かう途中、復活した主に出会ったことを記しているが、このもう一人のお弟子とは教会の伝承によれば、著者であるルカ自身であると伝えられている。この時、二人はイイススが十字架につけられ、しかもその遺体が忽然と墓から消えてしまったことですっかり落ち込んでいた。そこに旅人の姿で現れた主は二人と共に歩いて行った。そして主が宿の食卓でパンを割いて二人に渡すと、二人の目は開け、彼等はその旅人こそ復活した主ご自身であることに初めて気づいた。彼等は「彼が道中で私たちと語り、聖書を解き明かした時、私たちの中で心が燃えていたではないか」と語りあい、イエルサリムに引き返して聖使徒たちに自分たちが復活した主に出会ったことを熱く語ったのであった。

後にルカは、聖使徒パウエルの伝道にあたり、彼の同行者として共にローマまで旅をする。聖使徒行実十六章以降、「我等」という主語の記事が続くが、このことは聖使徒行実が単なる伝聞や創作ではなく、ルカ自身の生きた体験の記述であることを物語っている。この伝道旅行の途中でパウエルは何度も逮捕・監禁され、またローマに向かう船は途中で難破するなどして彼等は何度も死の危機に直面する。しかしパウエルを支えたのは、ダマスクへの道で復活した主に出会った体験（聖使徒行実九章）にあったように、彼と苦労を共にしたルカにもまた、エムマウスへの道中で復活した主に出会い、「心が燃えた」体験を持っていたのである。

私たちの信仰もまた、単なる生活習慣や冠婚葬祭儀礼ではなく、ルカのように心が燃える生き方を目指すものでありたい。

□

ロシア正教会駐日ポドヴォリエ

アレクサンドル・ネフスキ聖堂の成聖

司祭ディミトリイ田中 仁一

去る九月十二日は、折しもロシア正教会暦では、ネヴァの聖大公アレクサンドルの不朽体の遷移の記憶及びモスクワの聖大公ダニイルの祭日であった。我らの尊貴なる東京の大主教及び全日本の府主教ダニイル座下の聖名日でもあるこの記念すべき日、ロシア正教会駐日ポドヴォリエの新聖堂の成聖式が満を持して行われた。当日記憶をなすところのネヴァの聖大公アレクサンドルの献じられた新聖堂は目黒の閑静な住宅街に建てられている。この記念すべき日にあわせて、ロシア正教会モスクワ総主教庁渉外局長キリル府主教座下が

渉外局員で秘書のディミトリイ・ペトロフスキ氏とともに九月十日に来日された。仙台の主教セラフィム座下は、すでに数日前に来日されていたウスリイの主教セルギイ座下、駐日ポドヴォリエ主任管轄司祭である長司祭ニコライ・カツェバン師、同じく長司祭イオアン長屋房夫師とともに、成田空港でキリル府主教座下一行を出迎えられた。

出迎えの後、キリル府主教座下は、千葉県山武市松尾町の聖ソフィア修道院を訪問され、モスクワからの空の旅が安寧であったことを主に感謝するモレーベンと八月二六日に永眠されたニコライ佐山大主教のためにリティアを献じ、永遠の記憶を祈られた。修道院のトラペザで暫し休憩し、セラフィム主教座下と歓談された後、キリル府主教座下一行は都内のホテルに向わされた。

翌日、聖ニコライが眠る谷中墓地を訪問されたキリル府主教座下は、ダニイル府主教座下を表敬訪問するため東京復活大聖堂教会に来会された。キリル府主教座下を出迎えたダニイル府主教座下は、先日のモスクワでの主教会議以来の再会を喜び、長司祭サワ大浪佑二師、長司祭ロマン大川満師、修道司祭ゲラシム・シエフツォフ師等とともに大聖堂内を案内された。キリ

ル府主教座下は、大聖堂至聖所に入ると、ご自分が十年前に大聖堂を訪れたときのことを語られた。日本正教会にとって歴史的に最も困難な問題を解決するため、日本正教会の代表と長時間の議論を交わしたことを思い起こしながら、日本正教会の自治確立以来、つねに日本正教会の発展を注視してこられたキリル府主教座下は、日本正教会を支えてこられた長老が壮健であること、そして新しい時代を担う若い神品教役者が徐々に増えてきていることを喜ばれた。ダニイル府主教座下と暫く歓談されたキリル府主教座下は、翌日がダニイル府主教座下の聖名祭であることに言及し、この慶賀の日に執り行われる新聖堂の成聖に続く聖体礼儀をダニイル府主教座下が司祷されるよう願われた。



▲ 宝座成聖の様子

新聖堂の成聖式には、日本ハリストス正教会を代表して長司祭サワ大浪佑二師、修道司祭ゲラシム・シエフツォフ師、輔祭グリゴリー水野宏師、そして司祭デイミトリイ田中仁一が招かれた。

成聖式に続くネヴァの聖大公アレクサンドルとモスクワの聖大公ダニイルの祭日となった記念すべき聖体礼儀を自ら司祷されたダニイル府主教座下に、キリル府主教座下は聖体礼儀後、敬愛の情を込めて記念のパナギアを贈られ、

ロシア正教会総主教アレクシイ二世聖下のメッセージを読み上げられた。

また、キリル府主教座下は、この度の新聖堂成聖を記念して、『これを機に日本とロシア双方の正教会の結びつきがより一層強化されることを希望する。この新聖





堂成聖に体現されるように、あなた方の喜びは私たちの喜びであり、あなた方の悲しみは私たちの悲しみでもある。いまこそ、日本とロシアの教会は一つの聖なる公なる使徒の教会として建立しなければならぬ」とのお言葉を賜れた。

新聖堂成聖と聖体礼儀に続いて、ロシア大使館において駐日ロシア大使主催の記念レセプションが行われた。キリル府主教座下に続いて挨拶に立たれたダニイル府主教座下は、『神が愛でないとするならば、今日この記念すべき日は訪れなかったはずである。この事実、まさに神が愛であることの証しである』とのお言葉を賜れ、キリル府主教座下と相愛の接吻を交わされた。



二〇〇八年度

東京正教神学院入学式

司祭ディミトリイ田中 仁一

九月十一日、光榮なる尊き預言者前驅授洗イオアン斬首祭に合せて、東京正教神学院の入学式及び始業式が執り行われた。本年度、東京正教神学院は、ダニイル府主教座下の祝福により神の光照を受けた二名の新入生を迎え入れた。東京復活大聖堂教会出身のクリメント北原史門兄と大阪正教会出身のルカ田畑隆平兄である。



学院長ダニイル府主教座下は、前驅授洗イオアン斬首祭聖体礼儀に続いて行われた入学及び始業の感謝祈祷の最後に静肅な心持ちの中でご訓示を賜れ、「この度、東京正教

神学院が二名の新入生を迎え入れることは大きな喜びである。この事実は、今後の神学生間での知性的な競合と霊的な切磋琢磨を促進するものと思われる。またそれ以上に、忍耐と謙遜と聖神の教導なくして神学を学ぶ者の属神的向上発展はあり得ない。神の慈憐と神の恩寵とを得た者だけが、真に霊的な意味での教役者となれる。どうか皆、この事を身命に刻んで学業にまた祈祷に勤しんで頂きたい」とのお言葉を述べられた。

聖神の働きは、さまざまな出来事の中から、今を生きる私たちに神に適う人の生き方を教えてくれる。これらの出来事は、歴史も含めて、現在を生きる者にとって常に最高の教材となる。それゆえに、時間という物理的枠組を超えて作用する聖神の恩寵に満ち溢れた教会の中で起こるさまざま出来事は、そこに自分の生き方の範型を見出そうとする者にとって、堅固な隅石の上に時間を掛けて建てられた建物のように、末永く堅固にその姿を保ち、堅実な成長を遂げるで





う隅石の上に堅立しているかぎり、神の恩寵と仁愛を恃んで生きる人の姿を具現できるはずである。誰もが聖人のように生きられるという希望を持てると同時に、誰もが現在の自分を顧み、自分と聖人との霊神的乖離の大きさに危機感を持たねばならない。

しかしながら、私たちは正教徒であると同時に市民でもある。社会的義務と責任を負い、わが国が制定した法制度に従って自分の所在を明確にしなくてはならない。神による人類創生から連綿と受け継がれた信仰と伝統を有する正教会です



あろう。なぜなら、教会は、慈憐と洪恩とを以って世界に臨んだ神の恩寵を獲得した「聖人」のシナクシスだからである。もし私たちが一人ひとりが聖人の生き方を学ばんとするならば、私たちが神・ハリストスへの信仰とい

ら、わが国の政治社会的制度の枠組の中では単なる一宗教団体に過ぎない。この信条と現実の本質的乖離が、ときとして神学を学ぶ者の精神生活に心理的困難を生じせしめることがある。

しかし、私たちは「一つの聖なる公なる使徒の教会」に属する者である。私たちは公民としてこの世に属しながらも、同時にハリストスの復活の証人でありその福音を伝える使徒である。神学は己を狭隘な世界に閉じ込めるための方便ではない。それは、ハリストスに在る己の生き方を学ぶための力の源なのである。



前列左2：クリメント 北原 史門 新入生
同列右2：ルカ 田畑 隆平 新入生

セルギイ府主教永眠記憶パニヒダ

(8月10日)

去る八月十日、故セルギイ府主教の六十三回目の永眠記憶日にあたり、谷中主教墓場にてダニイル府主教座下の司柩によりパニヒダが献じられた。

毎年、セルギイ府主教の永眠記憶パニヒダでは炎天下で体調を崩される方が出て、心配が絶えないが、幸いなことに今回は曇り気味で、連日の猛暑からは少し解放されたような陽気。ダニイル府主教座下と随行者一同は、主日聖体礼儀終了後の午後一時過ぎに、大聖堂から主教墓場に向けて車で出発。到着後ただちに府主教座下はパニヒダを献じられた。陪柩は大浪神父、大川神父、中西輔祭。東京復活大聖堂教会の信徒十数名も参加し、聖歌を歌ってセルギイ府主教への永遠の記憶を祈った。

セルギイ府主教(以下「師」と記す)の人となり、および亜使徒聖ニコライや日本教会との関わりについては、いま仙台の主教セラフイム座下が、ご研究の成果を本誌でわかりやすく連載しておられる。それらを拝読する限りでは、当時は師への批判的な評価も少なからずあったようではある。しかし、

筆者は日本正教会の信徒の一人として、師の教奇で過酷な生涯を思うと、「時代の中で生きる」ことについて深く考えさせられざるを得ないし、また、師の懸命な働きもあって、現在に至るまで日本に正教会が存続できていることに対しては、純粹に感謝と敬意の念を感じずにはいられない。

と言うのも、師は弱冠三十五歳で主教に叙聖され、来日するまでペテルブルク神学大学学長の要職にあったという、当時のロシア教会におけるエリート中のエリートであった。もし来日せずにロシアに留まっていたならば、位人臣を極めていたかもしれない(あるいは、そのために革命の時に悲惨な最期を遂げたかもしれないが)。しかし、来日後の時代の荒波は、師の人生を大きく変えた。

師が補佐した亜使徒聖ニコライの人物像は、おそらく「叩き上げのカリスマ型指導者」で師とはタイプが異なっていたと思われ、そのために師は聖ニコライの存命中はもちろん、永眠後もずっと比較され続けていたに違いない。その中で、ロシア革命による本国の帝政崩壊と教会の破壊、さらにその後の関東大震災という辛酸を嘗めながら、倒



▶セルギイ府主教墓石(谷中主教墓場内)

壊したニコライ堂を再建したのは紛れもない事実である。その功績は率直に認められるべきであろう。

時代が昭和になり、我国の反共・軍国主義化が進んだことで師は引退を余儀なくされ、またソ連共産党との関係を疑った憲兵隊により拘禁されたことは、結果として師の寿命を縮めることになった。そして師の拘束中に東京・世田谷の居宅は空襲で焼失し、遂に終戦の五日前、と言うより、師が望郷の念を抱いてやまなかった祖国が、日ソ中立条約を一方的に破棄して我国に開戦した日の翌日に、師は仮寓で寂しく永眠した。これらの劇的なまでに不遇な晩年は、師が望んでそうだったのではなく、全て時代がそうしたのである。



▶セルギイ府主教の墓前での祈禱

エリート神学者から孤独死に至るまでの七十四年の波乱の人生に、セルギイ府主教自身は何を思っていたか、本人のいない今となつては知る由もない。また、終戦から六十三年を過ぎ、戦後生まれが人口の大多数を占めている我国の現状では、戦前・

戦中の記憶そのものが社会の中で薄れているのも事実である。「日本と米国が戦争していた」ということ自体すら知らない若者も少なくないと聞く。しかし来日以来、一人の宣教師として、この理不尽で過酷な時代環境を黙って受け入れ、日本教会のために働き、最後は日本の土となった師の生涯は、福音書の字句「麦の粒若し地に遺ちて死なずば、独存す、若し死なば多くの実を結ぶ（イオアン13:31）」そのものであり、私たち日本正教会はセルギイ府主教の生涯に敬意を払い、いつまでも記憶し続けるべきなのである。

（輔祭グリゴリイ 水野 宏）



◀パニヒダに参拝された信者方々

聖ソフィヤ修道院

ニコライ佐山大主教ご永眠



8月26日、ロシア正教会ラメンスクの大主教ニコライ佐山大麓座下が永眠され、千葉県松尾の聖ソフィヤ修道院にて仙台のセラフイム主教座下、ロシア正教会ウスリスクのセルギイ主教座下により、パニヒダ、聖体礼儀と埋葬式が行われた。

ニコライ大主教座下は1914年に台湾で生まれ、1941年に東京正教神学院を卒業。アメリカのウラジミール神学院を経て、1956年に輔祭に叙聖された。1970年モスクワ総主教庁駐日ポドヴォリエの主管者となり、1984年に大主教に昇叙、1986年には千葉に聖ソフィヤ修道院を建立し、1996年からラメンスクの大主教、モスクワ教区の副主教となり現在に至る。

2003年のニコライ大主教座下の90歳のお祝いにはダニイル府主教座下とセラフイム主教座下もご臨席され、お元氣な姿を見せていたが、近年は高齢のために体力的にも衰えが目立っていた。

29日午前8時よりセラフイム主教座下司祷のもと聖体礼儀と埋葬式が執り行われた。埋葬式の冒頭、ロシア正教会総主教アレクシイ2世聖下、渉外局長府主教キール座下の弔辞がセルギイ主教座下により代読され、日本正教会よりダニイル府主教座下の弔辞をセラフイム主教座下が代読された。

埋葬式を終え、棺はニコライ大主教座下が長年住まった聖ソフィヤ修道院を一周し、参拝者の見送る中霊柩車に納められて横浜外人墓地に向かい埋葬された。

夏休み子ども会

名古屋教会では昨年、一昨年と夏休みの子供会行事は土曜から日曜にかけての「お泊まり会」のかたちをとってきました。聖堂わきの狭い駐車場にテントを男子用、女子用のふた張り設置して、ふだん味わえないワクワク体験してもらっていました。ただ今年は、昨年夜中に大雨が降ってパニックになったこと、また一部の少年少女たちが思春期も盛りを迎えつつあることを考慮し、土曜日のプログラム終了後はいったん帰宅し、日曜の聖体礼儀にまた参拝していただくというかたちをとりました。広い境内地と、子供たちに目配りできる成人の奉仕者がもう少し増えてくれれば、お泊まり会も可能なので少々残念です。

今年も雨にたたられましたが、八月二三日の土曜（スケート、お祈り、BBQ、花火）には十名、二四日の日曜には十一名の子供たちが集まりました。また十名近くの父兄を中心に信徒の方が協力してくださいました。

土曜日は教会を出て、愛知万博会場跡の「モリコロパーク」アイススケート場でのスケートが最初のプログラム。ほとんどの参加者が初めての体験で、最初は

おっかなびっくりでしたが二時間ほどの間にみるみる上達、「また行きたい！」の声があがりました。午後三時に教会に戻り主日の晩課をお祈りしました。日曜日も含め子供会期間中の奉事には、わかりやすく祈禱書を編集して積極的に子供たちにも参加してもらいました。私たち大人が考えている以上に、子供たちは奉神礼が大好きで、大人たちが「子供がいやがるので」と参拝を渋るのは、どうやら言い訳かな…、という感想も。写真は日曜の聖体礼儀、「幾とせも」の祝福を待つ子供たち。（楽しそうでしょう）。

土曜の祈禱後、雨よけに張られたビニールシートの下で行われたバーベキューでは、昨年に続き今年も米国のステーキハウスで働いていたミッチェル兄が見事な腕前を見せてくださいました。

どこの教会も子供たちの教会活動への参加が不活発なのが、信仰継承の問題にとって悩みの種ですが、「ごちゃごちゃ言わずにやってみる」、そして最初は参加者が二、三名でも毎年「続けてゆく」これが大切なことではないでしょうか。



（司祭ゲオルギイー 松島 雄二）

克肖なる我が神父

ラドネジの奇蹟者聖セルギイ

司祭ディミトリイ田中 仁一



聖人の生涯から、我々は霊的生活について学ぶ。聖人の生涯を知るにあたり、聖人にはロシア人、ギリシア人といった明確な国籍などないことを知っておこう。彼らはいつの時代にも、どこに住まわっていても、ハリストスを愛する正教人であり、皆同じ霊的芳香を放っていた。また、聖人の生涯を知るとき、どれだけの人が疑いの心を曇らせず、奇跡に懐疑的にならず、そこに含まれる聖性の宝蔵を獲得できるであろうか。何よりもまず主・神が我々の心の目を啓かしめんことを請おう。これこそ我々が聖人の生涯について学ぶにあたって、実り豊かなものとするための唯一の方法である。

ラドネジの聖セルギイは、ロシアで最も愛されている聖人の一人である。彼の生涯は、今も昔も変わることなく正教の霊的修養の源泉であり続けている。聖セルギイは

一三一四年ロストフで、敬虔で篤信な両親のもとに生まれた。伝承によれば、聖人はまだ母親の胎の中にあるときから、聖体礼儀中三度も大きな泣き声をあげたという。このとき以来母親は、まるで貴重な宝物を胎の中に抱えるかの如く齋を守りつつ、一切の罪の穢れから自身を遠ざけた。

ヴァルフォロメイの名で洗礼を受けた幼子は健やかに成長したが、読み書きが不得意であった。少年となったヴァルフォロメイは、ある日森の中で一人の聖なる長老に遇った。天使の様ないでたちの長老は「子よ、何が欲しいのか」と問いかけた。少年は、読み書きができるようになりたいと答えた。長老は少年に「君の信仰によって、主は必ず君にその能力を与えるだろう」と言った。安心した少年は長老に、両親のいる家まで来て下さいと懇願した。皆が家の祈禱部屋に集まると、長老は少年に大声で聖詠を読むよう言った。戸惑う少年に、長老は何も疑わず神の言葉を口にしよう命じた。すると、少年はいとも容易く聖詠を読み始めた。このとき長老は少年の両親に、彼は至聖三者の住いとなり神と人の前に大いなる者となるであろうと預言した。



両親の世話をしながら、ヴ

アルフォロメイは修道士になることを願った。やがて両親がこの世を去ると、彼は世間を離れ、彼の兄と共に森の奥深くに入り、そこに宿坊と聖堂を建て、それを至聖三者に献じた。偉大なるセルギイ至聖三者大修道院の歴史の始まりである。彼は二十三歳の時に修道誓願を立て、名をセルギイに改めた。森の中で一人修道を続ける聖セルギイの悩みは、野生動物―特に熊―であった。とりわけ一匹の熊が、食べ物欲しさによく聖人の所に来た。彼自身も飢える事がしばしばあるにもかかわらず、熊をがっかりさせまいと、自分の僅かなパン片を与えることもあった。聖神がその中に住まう者に、動物たちは従順になる。ちょうど創世の頃のアダムのように。

やがて、彼の周りに神を畏れる修道士らが住み始めた。孤高な中で己の救贖を完遂しようと森に住まった聖セルギイであったが、彼らの到来を神の佑助と受けとめ、彼らに言った。「荒野に住まうために来たのであれば、義の始まりは神への畏怖であることを知りなさい。」修道士らは各自自分の宿坊を建てて住み、聖体礼儀には聖人と共に聖堂に集まった。はじめ、近くの村から司祭が巡回に来ていたが、聖人はついに説得に応じて司祭叙聖を受け、さらに主教は彼を典院（イグーメン）に任命した。しかし彼は神父でありつつ、修道を願ってやってくる全ての者の僕でもあった。修道士らの家族の一員になると、続々と人々が聖セルギイの近くに集まってきた。やがて彼らの居住地の近隣に、居住地（ポサード）が出現した。これが後のセルギ

エフ・ポサードと近隣の村落に発展していくのである。聖セルギイは常に時間を怠らなかつた。絶えず祈りと労働に身を献じ、疲れ果てながらも常に天上のイエルサリムの住人になることを願って自分を鍛錬し続けた。

ある時、聖セルギイが生神女のイコンの前での祈りを終えると、突然輝く光が彼を照らし、彼はその光の中に生神女が聖使徒ペトルとイオアンと共に立っているのを見た。神聖の光は聖人にすら耐えがたく、彼は床に倒れこんだ。生神女は手を伸べて彼を起こすと、彼の修道と生涯共に居り、この修道院を護り続けることを約束した。斎と不断の労働、そして数々の奇跡を行いながらも、聖人はいよいよ高齢に達した。体は弱つても、神への情熱はますます強くなった。自ら予見した死期が近づくと、聖人は牧群を自分の傍らに呼んで言った。正教の信仰に堅立すること、互いの心の一なるを守ること、謙遜を身につけること、そしてこの世の尊敬と栄誉を求めず天国の喜びと永遠の祝福という褒美を神から賜るように努めること、これが聖セルギイの最後の誠めであった。一三九二年九月二五日、聖セルギイは七十八歳で彼の純粹かつ聖い霊を主に明け渡した。永眠後も聖人の身体は芳香を放ち、顔は雪のように輝いていた。聖セルギイは天使らに導かれ、生涯願ひ求めてきた至聖三者の光栄を見たのである。生神女は彼に対する約束を守り、その修道院はソヴィエト体制の軛の下でも活動し続けた。聖セルギイの聖なる不朽体に伏拝するために訪れる巡礼者は今日も後を絶たない。

聖ニコライとセルギイ府主教

⑤

主教 セラフイム

聖ニコライは「世界教会」という表現を好んだようだが、この時代、世界の正教会はどうだったのだろうか。

正教会と呼ばれる地域はビザンチン帝国と周辺の国々を重ねた版図であるが、一四五三年のコンスタンチノープル陥落と前後して、次々とオスマントルコの下に入った。

十六世紀スレイマン一世の時代、オスマン帝国はアジア、ヨーロッパ、アフリカにまたがる東地中海一帯をおおう大帝国となるが、その統治制度には特徴があった。

支配地域の宗教や民族単位の自治性を廃除することをせず、正教地域にあつては教会の機構を統治機構に組み入れたのであつた。現在、教会で主教品を「主宰」と呼ぶ習慣はこの時代の産物であり、主教品が世俗的な権威も持つようになつたことを表している。

オスマン帝国が衰えるにしたがい民族の自立を正教会を求心力に国家へと形成していくのは十九世紀に入ってからである。一八三十年のギリシャの独立のころから徐々に民族単位で国家が誕生していくが、正教会も国家に合せて独立していく。ビザンチン帝国以来のコンスタンチノープル・アレキサンドリア・アンテオケア・イエルサリムという四つの総主教区の他に、新たな枠組みとしての教会が生れて

いつたのである。当然、この時代には現在使われている「完全独立」や「自治」という文字が教会名に付けられることはまだなかった。

正教会の伝統では布教地で生れた教会の独自性や自治性を認めており、ロシア正教会も一四四八年の総主教選立までは「自治教会」であつた。

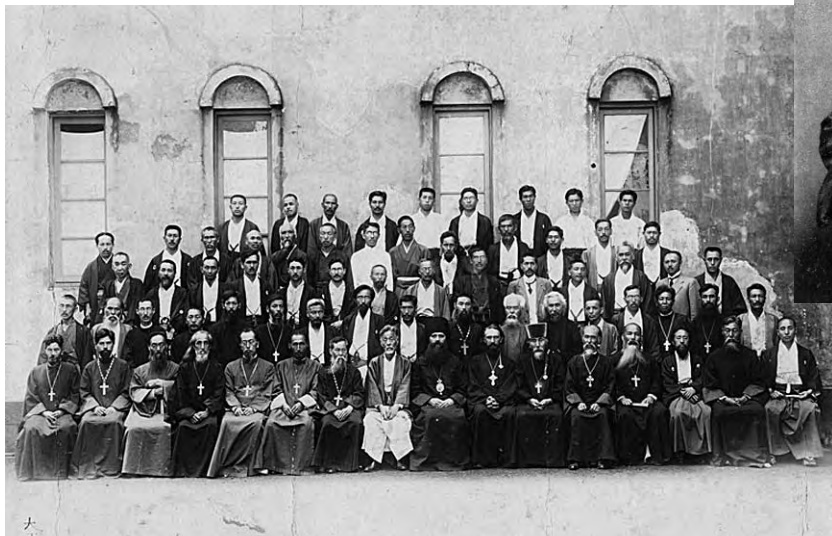
聖ニコライの時代、正教の世界はまだ混沌としており、その教会組織も変則的な状態が多かつた。ロシア正教会自体、ペートル大帝の時代以降「総主教制」は廃止され、その復活をみたのはロシア革命の真只中であつたことは周知のことである。

聖ニコライは日本の正教会を「露国教会マツタケに対して、全独立の教会」と述べたが、現在の教会法でいう「自治教会」とは少しニュアンスの違うものであつたはずである。

モスクワ神学アカデミー教授（教会規則及び教会史）長司祭ヴラジスラフ・ツイピンは「自治教会」というのは「一時的、過渡的な状態」であり、その先には二通りの道があるという。一つは自治教会が完全独立教会にまで成長し世



▼大正7年7月公会記念写真 (中央 セルギイ主教)



界の正教会から承認される場合。もう二つ目は自治教会が自治性を失い、完全独立教会の一教区となる場合である。
〔教会規則〕 1996 モスクワ)

「大主教ニコライ師事蹟」には「大主教ニコライ師の遺業」として次のように記されている。

大聖堂一 聖堂八 会堂百七十五 教会二百七十六
主教一 司祭三十四 輔祭八 伝教者百十五 信徒総
数三万四千百十一 外に永眠信徒累計八千七百七十 地
方会費年額二万九百四十六円五十六銭 地方教会財産
十三万九千五百〇六円五十二銭

大聖堂諸付属

正教神学校 駿河台 敷地 七百六十坪三七
女子神学校 駿河台 敷地 七百四坪一一
山林・相州塔ノ澤一町四反二畝七坪五 京都聖堂・柳馬
場四百七十坪 大阪聖堂・東区石町 六百〇四坪三七
松山聖堂・松山市に百九十四坪三六 独立基金
二万二千〇五十二円八十七銭 育英資金二万二千四百九十九円
雑種積金二万五千九百九十七円〇二銭

明治四十五年七月、聖ニコライが永眠してから最初の公会でセルギイ府主教(主教)は教勢報告の不正確な事を指摘する。

「〓昨年の公会に於て報告せられたる信徒の総数は三萬有余名とあり、然るに今人々に正教会の信徒の实数如何と問ふならば皆知らずと答ふるなる可し。余が各教会を巡回

して実地に調べたる結果に依りて考ふれば信徒の現在員一萬二千人位なる可し。我等は全教会の信徒の数多く計算して樂觀せんよりも、今は実際の状況を考えて領洗者の増加せる事を感じると共に、又信徒の冷信或は行方不明になりたる者の多きを見て、大に痛悔の心を起さ、る可からざる」

聖ニコライの時代から教勢報告の数にしばしば疑問の声があったが、セルギイ府主教は来日以來日本各地を隈なく巡回し、その実情を把握していたのであった。

日本正教会は長い間、信徒数を約三万と公称していたが、この時点ですでに過大な数である事が明らかにされたのである。

セルギイ府主教は司祭たちに正確な数を調べることを命じ、「今は我等己れを欺くを要せず、実際の数を調べ置きて、今不明になり居る信徒や冷淡になり居る信徒より将来に教会に加はる信徒をも知る得可し」と説いた。

この公会の最終日にセルギイ府主教は次のような提言をする。「神父方、余は教会の事に就きて種々の事を考へ、是非余の側に別の会を設くるの必要を認め、三四月頃考へて茲に別の規定を設けたり」

「日本ハリストス正教会諮議局制規」を定めたのであった。その第一条は「日本正教会主教の許に常置諮議局を設置す」であり、主教の諮問機関を神品と信者で構成するというものである。

明治四十二年の公会で聖ニコライが拒んだ教会統治機構

への神品・信徒の参画をセルギイ府主教が求めたのであった。聖ニコライの時代にはこのような機関は特に無く、すべて主教と公会の権に依っていたが、セルギイ府主教はロシア正教会の「聖務会院」を模した機関を日本正教会に新たに設置したのである。

「常置諮議局」は教会の「治理 裁判 財政」を審議する機関であった。第二十六条にあるように「常置諮議局の総ての制定は主教の自署公印を得て始めて効力を有するもの」であり、聖ニコライ亡き後、唯一の主教品であるセルギイ府主教の諮問機関として発足したもののだが、後に教会の置かれた状況の推移によりその性格が変質していくことはこの時誰も予測し得なかつたに違いない。

時代が明治から大正へと移った時、日本正教会も世代交替が進んでいく。マトフエイ影田孫一郎(M45・6)、パウエル澤邊琢磨(T2・6)をはじめとし多くの古参神父たちが永眠していった。

セルギイ府主教は教会統轄者としての環境を整えるために司祭の移動を行う。本会にはシメオン三井神父、四谷正教会にはパウエル森田神父を配置し、体制の一新を図るが、それは教会の「ニコライ色」からの脱却とも言えるものであった。

教会機関紙「正教新報」を「正教時報」と改題したが、第一号の「発刊の辞」では「新たなる時運に際會し、新たなる社会に向ひ、新たなる生命の本源たる基督の福音を傳ふるが為には、新酒を古き革囊に盛るを得ず、凡てを更新

して内外共に其舊態を改めざる可からず」(T元11・10)と宣言する。そして「我が正教時報は日本正教會の機関たる性質の上よりいふも、本誌は兎に角正しく我が日本正教會の信仰の表現と其神学思想を代表し、以て信徒の教養に資し、一般教役者の修養の幾分をも利するの職責を完うせざる可からず」とその性質を位置づけた。

「正教時報」の改題に象徴される日本正教會の変革は宣教・牧会という面でも現れた。セルギイ府主教は聖ニコライ永眠の翌年の公会では次のように述べている。

「東京は従来本會に何等の催しも無かりしを昨年より毎日朝夕に聖堂に於て公祈祷を行ひ、又傳道館に於ては傳教その他の働きを為し居れり」

聖ニコライの存命中でも、東京各所に教會があつたといえ主日の参拝者は少なく、本會を中心とした宣教活動も停滞していたのであつた。

セルギイ府主教は「正教の土着化」にも目を向けた。大正三年の公会では永眠者の為の祈祷をもっと盛んにすべしと勧告をした。日本では春秋の彼岸に異教徒は死者の供養をするのに正教徒は何もしないと述べ、この日を教會の祭日とし永眠者を供養してはどうかと問う。そして顕榮祭の果実の成聖なども普及させ、日本の穀物や野菜などの初物の成聖をする「新しい習慣」を作ることを勧めた。

セルギイ府主教は言う。「我が日本正教會の信徒は佛教の儀式習慣を棄て、信徒になつてより、未だ信徒の新しい儀式習慣を作り居らざるなり。余は六年間の中に深くこ

の事を感じたり。信仰は有り居りても、其が未だ信徒の生活に入り居らざるなり。宗教は生活を立てざる可からず。日本にては佛教の信者は兩請^{アマゴ}ひを為すも、ハリストス教の信徒はこれを為さざるなり。露国にては麦を刈取れば直ちに感謝の祈祷を奉るなり。宗教は頭の教えにあらず(即ち思想上の教えにあらず)宗教は生活なり。信仰は段々に深くなつて、頭より下にまで入るならば、信仰の冷淡になる事も追々無くなる可し」

このセルギイ府主教の指摘は信仰とは何かを端的に表すもので、いつの時代でも指標となるべきものであろう。

またこの公会では改めて、教會財政の確立を訴えている。日本正教會には伝道会社からと聖務会院からの二つのルートで送金されていたが、いずれも不確かなものでいつこの金が途絶えるかわからないと警鐘を發したのである。

聖ニコライは日本の正教會の為に最初の七年間の補助を聖務会院に願ひ、七年後には自立をすることを約束したが、それが果たせないまま何の保障も無く三十五年間も補助を受けていたのであつた。

大正四年の公会では欧州の戦争という時局にもかかわらず領洗者が増えていることが報告されている。しかし、この戦争がやがてロシア帝国の崩壊につながり、ロシア正教會が困難の中に陥り、その影響が直ちに日本正教會に及ぶことになるとはその氣配すらも感じさせるものではなかつた。

(続く)

正教会ククロスワードパズル

(作成 ダヴィド水口)

1	2		3		4		5	6
7			8				9	
	10				11			
12			13		14			
15		16				17		18
		19		20		21		
22	23		24				25	
			26		27	28		
29		30		31	32			33
	34				35			

クロスワードを解いて、正教会の教え、祈祷、聖書に親しもう。
 正教会訳新約 口語訳聖書 聖詠経、祈祷書、楽譜、などを手元において、じっくり調べながら挑戦しよう!!

タテのヒント

- タテのヒント
- 1 洗礼機密の時に読まれる福音書の最後の節「視よ、我、恒に爾等と偕にして○○終末まで在るなり、アミン」
 - 2 オルソ(正しい)ドクサ(教え・讚美)
 - 3 正教会の結婚式 ○○○○機密
 - 4 ハリストティアニンになるための機密
 - 5 「○○○○○のように輝いているいのちの水の川」(口語訳 黙示録 22:1)
 - 6 「鶏の鳴かざる先に、爾、三次我を○○○○」(正教会訳 マトフェイ 26:34)
 - 12 石板に刻まれた十の戒め
 - 13 病の時に油を塗って癒しを願う機密は、○○○機密
 - 14 「あなたを造り、あなたを○○○に形造り、あなたを助ける主」(口語訳 イサヤ 44:2)
 - 16 旧約の民が目指した約束の地は「○○○の地」(詩編 105:11他、参照)
 - 17 大連祷「ハリストスに○○○輔祭職」
 - 18 天主経の前の祈り「主宰や、我等に○○○を以て、罪を獲ずして、敢て、爾天の神・父を呼びて言うを賜え」

注意点：固有名詞の表記に違いがありますので、各々「正教会訳」とか「口語訳」(新共同訳とは異なるので注意)とか「新共同訳読みで」など、ことわり書きに気を付けてください。

ヨコのヒント

- 1 マリヤの夫 イイススの養父（口語訳読みで）
- 4 成聖する時に使用する聖なる水
- 7 「○○の日の如く、人の子の来るも亦、是くの如くならん」（正教会訳 マトフェイ 24：38）
- 8 正教会における聖職者の総称
- 9 領聖祝文「神の子や、○○、我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え」
- 10 「私は、…細布をかぶらせ、○○のきれであなたをおおった」（口語訳 エゼキエル書 16：9～10）
- 11 パニヒダ「諸々の○○○○と諸々の肉体との神…」
- 12 「○○よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ」（第44聖詠11節）
- 13 御聖体をいただくための機密 ○○○○機密
- 15 第二の洗礼とも言われる罪の赦しをいただくための機密 ○○○○機密
- 17 五人の賢い乙女は「油を○○○していた」（口語訳 マタイ 25：4）
- 19 ハリストスに「詭譎（いつわり）なき者」と言われたガリラヤのカナ出身の門徒（正教会訳読みで）
- 22 聖像
- 24 「○○○、われわれは主に仕えます」（口語訳 ヨシュア記 24：21）
- 25 「○○を以てせしに非ず、即、活ける神の神°を以て…心の肉碑の上に…」（正教会訳 コリント後3：3）
- 26 「○○○、婦（おんな）よ、爾の信は大なり、」（正教会訳 マトフェイ 15：28）
- 27 「天は神の光栄を○○○、穹蒼は其の手の作る所を語ぐ」（第18聖詠2節）
- 29 主の弟子のことを正教会ではこういう
- 31 聖詠經に記載されている永眠者の為の祈り「…○○○○に三位を正しく承け認めて臨終の息に至れり…」
- 34 洗礼の後、聖神降臨の為に聖膏を塗る、○○○機密
- 35 降誕祭のコンダク「蓋、我等の為に、○○○○○の神、嬰兒として生まれたり」

- 20 婚配機密でぶどう酒を飲み交わすことを「○○○○の杯」と言う
- 21 ダヴィド王の父（正教会訳読みで）
- 23 ロマ書とガラテヤ書の間位置する○○○○前後書（正教会訳読みで）
- 25 マリヤの讃歌「アウラムとその○○○とを世世に恤まんことを記念せり」（正教会訳 ルカ1：55）
- 28 聖体礼儀で聖祭品を覆う大きな布
- 30 「起きて、爾の○○○を取りて爾

の家に往け」（正教会訳 マトフェイ 9：6）

32 芽を出し、花咲き、実を結んだアロンの○○○は、生神女マリヤの予象とされる（民数記17章 参照）

33 升壇外の祝文「爾が○○○の美なるを愛する者を聖にせよ」



答えは次号で発表します。

答：

A	B	C	D	E	F	G

【パズルの答えを10月20日迄に正教時報社宛お送り下さい。正解者の中から5名に景品を贈呈。】
 なお当選発表は、景品の発送をもってかえさせていただきます。

『神への途』みち (2)

3章 心の菜園

あなたの始める新しい生き方は、しばしば農業のようなものにたとえられます。農家の耕す土は神から与えられたもので、同じように種や暖かい日の光、雨、そして種の成長する力もそうです。ただ菜園を手入れすることは管理者の働きに任せられています。

もし菜園での豊かな実りを実現させたいと願うならば、朝早くから遅くまで働き、雑草を取り、剪定をし、水をやらなくてはなりません。収穫に至るまでには多くの障害があるからです。そのため常に注意深く菜園を見守り、また休みなく働くことは当然です。それでも収穫に至るまで自然界の必要最低限な要素（天候など）に頼らなくてはならないのも事実です。同じように心の菜園においては神に頼るのです。

これから私たちが世話をしようとしている菜園は私たち自身の手です。そして実り豊かな収穫は「永遠の生命」です。

「永遠」とは時間、空間、また他の様々な要因を必要としない状態です。ですからそこにある生命は真に自由な生命なのです。愛、慈悲、光におけるいのちは何の束縛もありません。それらが「永遠」なるものに属する為です。またこのような生き方は聖神が導くところの信仰的な生き方、あり方、と言えます。この生き方は物質的なものによって得られるものではありません。この生き方は人間の心から始まるのです。

「自分を責めなさい。そうすれば敵は厳しく自分自身を責めるあなたに恐れをなして逃げて行ってしまふ」とシリアの聖イサクは言います。まず自分自身と和睦しなさい。そうすれば天と地もあなたと和解する。あなた自身の心の奥底を、痛みを伴いながら探りましょう。そうすれば天の国を見る事が出来るのです。自分自身を探ることで神への途を見出す事が出来るからです。神の国にいたる階段はあなたの内にあります。あなたの心の中に隠されているのです。罪による重荷を投げ捨てましょう。そうすればあなたの中にある神の国への階段を見つける事が出来ます。その階段はあなたを神の高みへと導いてくれます。

聖人たちの言う天の国とは「永遠の生命」を別の名前で呼んだものです。これは天の王国、神の国とも呼ばれますが、単に「ハリストス」とも呼ばれるのです。ハリストスにあって生きることは、永遠の生命に生きることなのです。

『神への途』(Way of ascetics) は、一九三〇年代にスウェーデン語で出版され、正教会の精神性を西ヨーロッパに紹介した本をシリーズで掲載します。著者テイト・コリアンダーはロシア、セント・ペテルスブルグ生まれで、生涯の大半をフィンランドのヘルシンキで過ごしました。正教会一信徒と言う立場で宗教書、世俗書に関わらず多くの書籍を残した人です。

4章 内に秘めた戦い

さて、私たちが今始めた戦いがどこで行われるのか、何を勝ち取り、何を目標とすればよいのか見えてきました。またなぜ私たちの戦いが、内に秘めた戦い（目に見えない戦い）と呼ばれるのかも理解できたのではないのでしょうか？全ての戦いは心の中です。その戦いは音も立てず、私たちの心の奥で行われるのです。これは実に真剣勝負なのです。聖師父たちは、口をしつかりと閉じ、あなたの思いを漏らしてはならない！と教えます。もしサウナ室の戸を開けっ放しにしたならば、熱気が抜けてサウナの用を果たさなくなってしまう。

ですから誰にもあなたの決意を人々に口外すべきではありません。この新しく始める生き方、それに伴う試練、期待を言いふらすべきではありません。これはあなたと神御自身の問題なのです。もし例外的に誰かに話す必要があるとすれば、それはあなたの痛悔司祭でしょう。

この沈黙は必要です。というのは、自分の決意に伴う心配事おしゃべりの種にすることによって、自分の問題しか目に見えなくなり、また自身に対する信頼を増長させることになるからです。このようなことは真つ先に振り払わなくてはなりません。沈黙を通して、隠れたものを見通す神への信頼は成長します。静けさを通して、信仰者は言葉を用いずに聴く神に語りかけます。神のもとに走りつくことはあなたの目標です。そうして神はあなたの支えとなり、あなたは永遠に神に結ばれます。神と永遠に結びついている時、言葉は必要なくなるでしょう。

大なり小なりこれから先あなたに起こる出来事は、あなたの戦い（苦難と繁栄、試練と失敗等）を助ける為に神によって送られたこととして捉えることが出来るのではないのでしょうか？神のみがあなたにとって何が必要か、どの瞬間に何が必要か、すべてをご存知です。偶然の出来事というものはありません。また偶然に起こったように見えることであっても、そこから学べないことはありません。すぐにこのことを理解することが必要です。これが、あなたの従おうとする主に対する信頼が成長する手段なのです。

もう一つ聖師父たちがあなたに送る言葉を紹介しましょう。幼子がひとつずつ言葉を覚えるように、また歩くことを一歩一歩学ぶように。自分自身もそのように見なしなさい。すべてのこの世の知恵、あるいはあなたのすでに知っているかもしれないこの世の方法論はあなたを待ち受ける戦いにとつて全く無意味なものとなるでしょう。同じように社会的地位、財産も何の助けにもなりません。主のために用いられない財産は重荷です。心に働きかけない知識は不毛で、それどころか自身を傷付けることとなります。これらはみな自己を過信することによって引き起こされます。暖かみもなく、愛を示さない知識は裸も同然です。ですからそのような知識を捨て、何も知らない人のようになりましょう。豊かな人になるために、貧しい人になりましょう。強い人となるために、弱い人になるうではありませんか。これらは叡智を得る為に必要なことなのです。

今月の奉事式

10月5日(日) 五旬祭後第16主日		第7調
<p>コリント後書 6章1節から1節 他人から不当な、謂れのない苦しみを被る時、助けと導きを与えられる神。</p> <p>マトフェイによる福音書 25章14節から30節 テーマ タラントの譬え。</p>	<p>教 理 神から賜物を生かすように努める者には真の喜びが与えられ、そうでない者はハリストスによる裁きを受ける。</p> <p>学び取れること 自分に与えられた賜物を充分に使えるように生活すること。</p>	
10月8日(水) ラドネジの奇蹟者セルギイ祭		祭日調
<p>ガラティヤ 5章22節から6章2節 ルカによる福音書 6章17節から23節</p>		
10月9日(金) 聖使徒福音者神学者イオアン祭		祭日調
<p>イオアン公書第一 4章12節から19節 イオアンによる福音書 19章2節から27節, 21章24節から25節</p>		
10月12日(日) 五旬祭後第17主日		第8調
<p>コリント後書 6章16節から7章1節 神を畏れ、敬うことで清い生活に進むことができる。</p> <p>マトフェイによる福音書 15章21節から28節 テーマ カナン人の娘の癒し。</p>	<p>教 理 神は私たちの信仰や愛、祈りへの姿勢を試みるため、時には私たちの願いを直ぐには聞き入れられない時もある。</p> <p>学び取れること 神の無限、永久の愛を待ち望み、絶望してはならない。</p>	
10月14日(火) 生神女マリヤの庇護祭		祭日調
<p>エウレイ書 9章1節から7節 ルカによる福音書 10章38節から42節, 11章27節から28節</p>		
10月19日(日) 五旬祭後第18主日		第1調
<p>コリント後書 9章6節から11節 真心からでる神への捧げ物は受け入れられる。</p> <p>ルカによる福音書 5章1節から11節 テーマ 12人のお弟子たちの召し出し。</p>	<p>教 理 神は如何なる時、如何なる場所においても、我々を招いておられるから、私たちはそれら応えられる生活を進めねばならない。</p> <p>学び取れること 神の招きを畏れることがあったとしても、神はそれを改め、神の愛に向うものにして下さる。</p>	
10月26日(日) 五旬祭後第19主日		第2調
<p>コリント後書 11章31節から12章9節 神は私たちの理解を遥かに超える大いなる智慧をもって恵みをお与えになる。</p> <p>ルカによる福音書 5章1節から11節 テーマ 敵を愛する愛。</p>	<p>教 理 神は自分に背く者をも愛して下さる。それと同じように、私たちも敵を愛する愛を持たねばならない。</p> <p>学び取れること 自分を愛してくれる者に愛を注ぐことは誰でもできる。自分に敵対する者を愛してこそ、神の愛に近づくことができる。</p>	

第八回正教会クロスワードパズルの答え

シ	ヨ	ジ	ヨ		テ	オ	ト	コ	ス
ユ	メ		カ	ミ	コ	ト	バ		プ
ウ		エ		ツ		メ		ヤ	リ
シ	セ	イ	シ	ケ	ツ		ジ	マ	ン
ン		テ	ン	タ	ツ	シ	ヤ		グ
	ア	イ	カ		シ	ン	ド	ウ	
フ		ド		カ	ミ		ウ		ミ
ク	ト	ウ	テ	ン		サ		キ	ズ
イ	チ	ジ	ク		タ	ン	ジ	ヨ	ウ
ン		ヨ	ビ	サ	ケ	ビ		ウ	ミ

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
シ	ヨ	ウ	シ	ン	ジ	ヨ	マ	リ	ヤ

編集後記

大抵の人は、ある年齢に達すると、体力や健康への自信喪失を味わうようになる。急に血圧が高くなったり、内臓機能の数値がよくないと言われたり、身体はどこかが痛くなったりする。若い時には一晩経てば忘れたような症状も、必ず治るといふものではない。騙し騙し気長につき合う姿勢が大切になる。年齢と共に新陳代謝が落ちていくのに、若い時と同じように食べれば太る。エネルギーを消費しきれないからだ。私たちはいつも失うことに対しての準備をしていかなければならない。この世のものは何一つ永遠ではない。長く生きれば「得る」こともあるだろうが、それ以上に「失う」ものも多い。

聖パウエルは別れの悲しみを教えたが、またその中に救いも見せている。今泣くことがあっても悲しむなど言っている。人間にとって失う悲しみは大きなものである。聖パウエルは人間の死が喪失と同時に解放を与えることにも触れている。人は一度に死ぬのではない。機能が少しずつ衰えていくのである。限りある生命をそれぞれが精一杯に生きて終わった。

聖ニコライ日記を読みながら、日本の教会に係わった多くの人々の馨咳に触れたような思いで身が引き締まった。

□